

- ◆ 辞書の積極的な活用により言葉の意味を深め、内容理解を目指した授業展開の例 高等学校  
 (同じ教材を高等学校の立場から扱った場合の例)  
 古語辞典を授業の中で積極的に活用し、現代の用例との違いや言葉の持つ広がり注目させるとともに、中学校で学習した和歌の修辞技法や口語文法の知識をもとに、男たちの心情を中心とした内容の理解を目指した授業展開の例である。

本時の目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 辞書の積極的な活用を通して、言語感覚を磨くとともに古典に親しむ態度を養う。</li> <li>○ 助動詞の文中での働きに着目し、正確な口語訳をする姿勢を養う。</li> <li>○ 和歌の修辞技法を理解し、人物の心情を把握する。</li> </ul>		
過程	学 習 活 動 ・ 内 容	時間	指 導 上 の 留 意 点
導入	1 本時の学習目標を確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;">             辞書の活用を通して、語句の意味を理解するとともに、人物の心情を理解する。           </div>	5 (分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○中学校で学習した内容であることを確認するとともに、作品についての印象を確認する。</li> </ul>
展開	2 本文の音読をする。 ・ 範読 ・ 各自音読 ・ 指名読み ・ 一斉読み ・ 和歌のみの一斉読み 3 古語辞典により、難解な語句、古文特有語、古今異義語など重要な言葉を確認する。 ・ 要なし ・ 思ひなす ・ 下りゐる ・ 乾飯 ・ おもしろし ・ 助動詞「じ」「べし」「けり」「き」「ぬ」 4 全体の流れを確認するとともに、適宜口語訳をする。 ・ 「思ひなして、」 ・ 「京にはあらじ、」 ・ 「いとおもしろく咲きたり。」 5 和歌の修辞技法を確認する。 ・ 序詞 ・ 枕詞 ・ 縁語 ・ 掛詞 ・ 折り句 6 人物の心情についてまとめる。 ・ 和歌の内容をもとに考える。 ・ 当時の旅について想像する。	5 (分)  35 (分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○古文の読みに慣れさせ、和歌のリズムを正しく把握できるように声を出して読ませる。また、歴史的仮名遣いにも注意させる。</li> <li>○文脈の中で意味をとらえるように指示する。また、辞書の引き方に習熟していない生徒には、個人指導をするなどの配慮をする。</li> <li>○助動詞については、中学校で学習した口語文法との関連を意識させるとともに、用例を確認させる。</li> <li>○全訳だけにこだわらず、文末表現に焦点化することにより、助動詞などの定着を図る。</li> <li>○ただ教え込むだけでなく、修辞技法を生徒自身に発見させるように発問に工夫する。</li> <li>○ノートに自分の考えを書かせる。次時の発表に備える。</li> </ul>
終結	7 本時のまとめをする。 8 次時の予定を知る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;">             人物の心情について発表し合うことにより、物語の内容を把握する。           </div>	5 (分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○和歌や重要語句について触れることで学習内容の確認をする。</li> <li>○次時まで和歌の暗唱ができるよう、音読の練習を促す。</li> </ul>

(時間配当等は、各学校の実態に応じて行う。)